

更級への旅

41

シリーズ初回で菅原孝標の娘が
つづいた「更級日記」を書き写したの
が藤原定家と紹介しました。この人
は新古今和歌集の編者の一人であ
り、のちの歌人から最も尊敬される
歌人の一人です。「小倉百人一首」
の選者でもあります。一一六二年に
生まれ一二四一年、八十歳で死去、
平安時代末期から鎌倉時
代を生きました。

平安時代末期から鎌倉時
代を生きました。

▽名所絵の一つに

今私たちが読める「更
級日記」も定家が書き写
してしてくれたから、読
むことができます。それ
くらい大事な人なので
が、「藤原定家」(村山修
一著、吉川弘文館)など
定家を研究した本を読む
うちに、定家にとって「更
級」は一つ特別な意味を
もっていたのではないか
と思うようになりまし
た。

「更級」に心引かれた藤原定家

定家が「さらしな」に
こだわった一つの証拠が
京都にあった最勝四天王
院の障子画です。定家は
朝廷から最勝四天王院に
描く名所の選定を任せ
られ、そのうちの一つに「更
科の里」を選んだのです。
前四十回で触れまし
たように、障子画は歌
と絵をセットにするの
が一般的で、歌につい
ては定家の姪にあたる
「藤原俊成女」の歌を選
びました。彼女は当時の
有力な歌人の一人です
た。歌はへ里の名の秋に
わすれぬ月影に人やはつらきさらし
な山。意味は、さらしなとい
う里の名前を聞くと、どうしても月が
照って心を慰めがたい秋の夜の娘捨
山のことが思い起こされる—という
ことでしょうか。

定家は現地を調査させるこだわり
をもって名所選定にあたったという
ことです。ただ、当地にも調査が実
際に及んだかどうか分かりませ
ん。定家が四十六歳のころの大仕事

です。ただ、残念ながら、最勝四天王院は定家が存命中に壊されてしま
いました。障子画を見ることはでき
ません。

▽「信濃守」は名誉？

定家の思い入れをうかがわせる二
つ目が、六十六歳のこ
ろに、信濃国司となっ
たことです。国司とい
うのは今で言えば都道
府県知事のような行政
長官のことですが、こ
の時代は現地に赴任せ
ずに都にいながら「遥
任」という形で職を担
う公家がたくさんお
り、定家もその一人
だったと思われま



藤原定家の墓

当時の公家は全国各地に荘園を抱
え、そこでの税金からいくらかを
取って生活費にしていました。歌人
で有名な定家ですが、だからとい
つて歌を作って食べていたわけではな
く、あくまで稼ぎは別で、歌は貴族
社会での存在意義を示す手段でもあ
りました。

そしてこの信濃国司の仕事も朝廷
側から依頼されました。当時は地方
がなかなか朝廷の意向にしたがって
くれない時代で、信濃国もその一つ
で、どうも手を焼いていたようです。
それでもあえて定家が引き受けたと
ころに「さらしな」への強い関心を
感じるのです。

信濃国司も引き受ける

定家が残した日記で国宝となった
「明月記」には「名字国務の名に懸
る」を以って引き受けることにした、
という記述があるそうです。これは
「信濃守」という肩書きを持つこと
が、何よりも名誉だったということ
ではないでしょうか。

明月記によると、定家は信濃国に
使者を派遣しています。彼は使者か
からいろいろな報告を受けたと思
うのですが、明月記には「使者、信濃
より京都に帰り国情を報ず」とし
たうえで、「更科の里」の場所につ

て「更級の里姑棄山おぼすてやま」に対す。里の南
西に在り」と、わざわざ記している
のです。

▽七歳のとき清涼殿に

定家が「さらしな」について詠ん
だ和歌も列挙します。

へきりはれて行末てらす月影をよ
もさらしなと何思ひけん

へ更級は昔の月の光かはただ秋風
ぞをばすての山

へ慰まずいずれの山も住みなれし
宿をばすての月のたひねば

へたずねみよよし更級の月ならば
慰めかぬる心しるやと

これらは定家が五十五歳のとき、
自分の作った歌を集めて編んだ歌集

「拾遺愚草」に盛り込まれているも
のです。古今和歌集にあるへわが心
慰めかねつ更級やをばすて山に照る
月を見てを背景にしてつくったこ
とがうかがえます(この歌につ
いてはシリーズ三十一回を参照して
ください)。

では、なぜ、定家がそれほど更級
に心引かれたのか。彼は七歳のと
き、清涼殿に父親である俊成と上
つたそうです。清涼殿とは四十回で触
れた京都御所の天皇の住まいのこと
です。確認はできていませんが、清
涼殿には「更科の里」の襖絵があ
った可能性もあり、定家はその襖絵を
見せてもらい、強い印象に残ってい
たとも考えられます。

▽更級日記は定家の命名？

さて、もう一度、定家の更級日記
の書写についてです。書き写したの
は七十歳ごろです。もともと病気が
ちな体質で、源氏物語をはじめとす
る古典を書写することが彼の心を慰
めたという説があります。彼はどん
な気持ちで更級日記を書き写したの
でしょうか。菅原孝標の娘という一
人の女性の生涯に、自分の来し方を
重ねたかもしれません。優美な彼の
歌には女性的な感性が感じられるの
で、男性でありながら女性の気持ち
にも理解が及ぶ人だったかもしれま
せん。

もともと更級日記は源氏物語のよ
うに広く読まれたものではなく、菅
原家に保存されていたものを定家が
借りて書き写した—と書いている研
究者がいます。根拠がよく分からな
いので真偽はわかりません。ただ、
もし、それが事実なら、「更級日記」
というタイトルの命名者が孝標の娘
本人なのかどうか確定的ではないと
されているので、定家が書写の際に
原本にはなかったタイトルを書き付
けたとも考えられます。

左の写真は、江戸時代の画家尾形
光琳がつくった百人一首「光琳かる
た」に描かれた藤原定家の肖像です。
歌はへ来ぬ人をまつほの浦の夕なぎ
に焼くや藻塩の身もこがれつつ。
平凡社の「太陽」二一〇号「藤原定
家と百人一首」から複写しました。
右の写真は定家の墓です。京都市上
京区の相国寺にあります。



発行 二〇〇六年 九月九日

編集 さらしな堂

(代表・大谷善邦)

〒三八九・〇八二三

長野県千曲市大字若宮一八四・六

(旧更級郡更級村)